

## 私のまちづくり

15期 堀田康彦

昭和19年5月、戦時下の神田淡路町に生まれ、米軍の空襲を避けて山形に縁故疎開のち、敗戦で神田に戻った。父は二度中国大陸に出征したが、敗戦後一年して無事、舞鶴港に帰還した。生家を含む神田の一部は奇跡的に空襲を免れ、食料統制時代を経て、家業の蕎麦屋を再開することができた。保育園、区立小、中学校を経て城南高校、法政大学と進み、両親とともに家業に携わって今日まで来た。75歳まで生家を離れることなく生きているという事は、どちらかといえば希少の部類になるのだろうか。

そのおかげか、友人知己多数の中での暮らしは、ストレスフリーで居心地がよい。他方では、地域のことに否応なく関わるが増えてくる。家業も四代目として受け継ぐと、次の時代に無関心ではいられなくなる。そんなこんなで取り組んできた様々の活動が、「私のまちづくり」の軌跡である。

四人の子供が生まれ学齢に達したころ、都心の過疎化の進行による公立小中学校における少子化問題が顕在化した。土地バブルは昭和の終わりまで膨らむだけ膨らんではいけなかった。後に残るは不良債権と用途不明の地上げされた土地。そんな中でも子供たちの教育の質を守るため学校統廃合に取り組んだ。父は母校の、伯父は他の公立学校の共に同窓会長として良き相談相手になってくれた。

父が、私たち兄弟が、子供たちが学んだ学校が無くなることを乗り越えて、次世代の教育環境を再構築することで今、孫たち世代は、安定した初等教育を受けている。

空いた母校の跡地に人口回復の根を植えた。再開発事業である。多くの人と意見を交わし、次の時代を生き抜くまちづくりを形にすることは、気の遠くなるような時間がかかる仕事だ。しかし流れに任せたままでは、願わしい私たちの街になることは望めない。願わしい街の姿を「人情・情緒を引き継ぎ大きなコミュニティを育む」として、住民地権者多数を含む「住み残り型再開発」に取り組み、2013年に落城を見た。今は開発テーマに沿ったエリアマネジメントに注力する日々である。

町の活性化は、永遠の命題である。日本人、就中江戸っ子が愛した活気にあふれ、思いやり、気配り、粋な振る舞いに満ち溢れる日々の暮らしが、市井人としてのささやかな幸せではないだろうか。

2010年、我が町（神田須田町1-3、靖国通り）にエドヒガンが植えられ、今では十余メートルに成長して春の彼岸時に美しい姿を楽しませてくれている。小灌木の緑地帯だった場所の改修時に、町の希望を道路管理者である東京都に伝えて実現したものだが、少しの工夫でまちは良くもなり悪くもなるものだ。トラは死んで皮を残す、というが、人は死んで桜を残す、と後世の人々に言ってもらえるかな？